

高音質なオーディオシステムを構築するための製品ラインアップ

コンパクトでモノラル動作も可能な多機能デジタルメーター搭載パワーアンプ

M-200

STEREO POWER AMPLIFIER

SPECIFICATIONS

- 連続実効出力：25W+25W (8Ω) /ステレオ時
35W+35W (4Ω) /ステレオ時
70W (8Ω) /BTLモノラル時
- 入力感度：1.0V / 25W (8Ω)
- 入力インピーダンス：16kΩ
- 全高調波歪率：0.005% (1kHz / 8Ω / 25W)
0.06% (20Hz~20kHz / 8Ω / 12.5W)
- 周波数特性：20Hz~20kHz (+0, -0.2dB)
10Hz~100kHz (+0, -3.0dB)
- S/N比 (IHF-A)：107dB
- 入力：アンバランス (RCA) 1系統、バランス (XLR) 1系統
- 出力：大型スピーカー端子1系統
- 消費電力：80W (電気用品安全法)、30W (無信号時)
- 外形寸法：364 (W) × 81 (H) × 297 (D) mm
- 重量：7.0kg



USB D/A CONVERTER

USB入力 96kHz/24bitに対応したコンパクトな多機能D/Aコンバーター

DA-200



SPECIFICATIONS

- 形式：2チャンネルD/Aコンバーター
- 対応サンプリング周波数：COAX / OPT入力 32kHz~192kHz、USB入力 32kHz~96kHz
- デジタル入力：USB、COAX、OPT ●デジタル出力：COAX、OPT ●アナログ入力：アンバランス2系統
- アナログ出力：アンバランス1系統、バランス1系統、ヘッドフォン1系統
- 全高調波歪率：デジタル入力 0.0009% (アンバランス)、0.0006% (バランス)、アナログ入力 0.003%
- S/N比：デジタル入力 119dB、アナログ入力 103dB
- 周波数特性：デジタル入力 2Hz~60kHz (+0, -3.0dB)、アナログ入力 3Hz~130kHz (+0, -3.0dB)
- 消費電力：11W (電気用品安全法) ●外形寸法：364 (W) × 81 (H) × 279 (D) mm ●重量：5.1kg

CD/SACD PLAYER

オリジナル・メカLxDTM搭載。CD/SACD対応のベーシックモデル

D-05



SPECIFICATIONS

- 対応ディスク：2チャンネルSACD、CD ●アナログ出力：アンバランス1系統、バランス1系統
- デジタル出力：同軸1系統、光 (TOS-LINK) 1系統
- デジタル入力：同軸1系統、光 (TOS-LINK) 1系統
- 出力電圧 / 出力インピーダンス：アンバランス 2.5V / 300Ω、バランス 2.5V / 600Ω
- 周波数特性：CD 5Hz~20kHz (-0.4dB)、SACD 5Hz~50kHz (-3.0dB)
- 全高調波歪率：0.0014% (CD時)、0.0017% (SACD時)
- S/N比：124dB (CD時)、104dB (SACD時) ●消費電力：20W (電気用品安全法)、1W (スタンバイ時)
- 外形寸法：440 (W) × 133 (H) × 410 (D) mm ●重量：14.7kg

INTEGRATED AMPLIFIER

プリメインアンプの最新世代Xシリーズ・エントリーモデル

L-505uX



SPECIFICATIONS

- 連続実効出力：100W+100W (8Ω) / 150W+150W (4Ω)
- 入力感度 / 入力インピーダンス：PHONO (MM)：2.5mV / 47kΩ
PHONO (MC)：0.3mV / 100Ω、LINE：180mV / 47kΩ
- 全高調波歪率：0.005%以下 (1kHz / 8Ω)、0.04%以下 (20Hz~20kHz / 8Ω)
- S/N比：105dB以上
- 周波数特性：LINE:20Hz~100kHz (+0, -3.0dB)
- 消費電力：270W (電気用品安全法)、85W (無信号時)、0.4W (スタンバイ時)
- 外形寸法：440 (W) × 178 (H) × 454 (D) mm ●重量：22.0kg

※ここにご紹介している製品はラックスマン取扱い製品の一部です。全製品ラインアップについては別紙総合カタログをご覧ください。

■ラックスマン株式会社
〒222-0033 神奈川県横浜市港北区新横浜1-3-1
TEL:045-470-6991 FAX:045-470-6997 www.luxman.co.jp

2011.12-HB M-200 Guide



携帯電話向けサイト

ラックスマン
公式ツイッター
@luxman_japan

AG00784E02A

最新版

パワーアンプ 徹底活用ガイド

コンパクトなパワーアンプM-200を使って
PCオーディオをはじめとする
様々な高音質システムを完全構築！



M-200

序 ステレオ・パワーアンプM-200とはp2

1 Basic System
最もシンプルなCDプレーヤーとの基本システムp3

2 Compact PC Audio System
DA-200との組み合わせでPC音源を楽しむp4

3 Powerful BTL System
M-200を2台使ったパワフルなBTL駆動にチャレンジp5

4 Complete BTL & Bi-Amp System
プリメインアンプとのバイアンプ接続に到達p6

5 スピーカーによる音場再生の楽しみとはp7

Powerful BTL System

Complete BTL & Bi-Amp System

序章 ステレオ・パワーアンプM-200とは

“PCオーディオ”という新たなスタイルが定着するようになり、PCとオーディオコンポーネントを結ぶUSB入力を装備したラックスマンのコンパクトDAC、DA-200もまたその中で存在感を増している。DA-200やP-200、E-200の手頃なB4サイズボディを持つ200シリーズに新たな製品が加わることとなった。それが同じB4サイズのコンパクトなボディを持つステレオパワーアンプM-200である。

PCオーディオと共に大きな市場となっているヘッドフォン・オーディオの世界であるが、リスナーの住環境や生活スタイルから来る制約によってスピーカーを置くことができないため、しかたなくヘッドフォンを使っているという話も耳に入ってくる。一方でヘッドフォンの世界からオーディオ全般に興味を持つきっかけを得たという方もいるのは事実であり、より手軽にコンパクトなシステムで、いかにスピーカーをドライブできる環境を得られるかが鍵となっているのだ。

このM-200は25W+25W (8Ω)という一般家庭のリスニング環境においては十分な出力を持つ2chのパワーアンプであり、プリアンプ機能や高品位なボリュームを装備して単なるUSB-DACに留まらない魅力を持つDA-200との組み合わせによって多彩な表現方法を得ることができる。詳しくは後述するが、M-200を2台用意することで実現するBTLモードを搭載しており、さらなるサウンドクオリティの高さとハイパワーを実現することができるのである。

それではM-200について、細かく仕様を確認してみよう。まず増幅回路部は上位機種同様の高品質パーツを投入したディスクリート構成を採用。その核心には高いスピーカードライブ



能力を持つPC150Wタイプの大容量パワートランジスタをプッシュプル構成にして搭載している。回路としてはラックスマンの最新技術による方式を用いており、コンパクトながらもしっかりとした音像の厚み、特性の良さを実現した。これら出力段を支える電源部であるが、高レギュレーションの電源トランスと5,200μF×2の大容量コンデンサーを投入したハイナリーシャ(高慣性)電源構成としており、整流回路にはスイッチングノイズが少なく、直流への変換効率の高い日本インター製ショットキーバリア・ダイオードを用いている。その他スピーカーリレーには高いドライバリティを実現する低抵抗値のものをLR独立の平行構成で投入。基板にはラックスマン伝統のラウンドパターン配線を用い、スパイラルラップ・シールドを施した内部配線やオリジナルカスタムパーツもふんだんに採用するなど、CPの高い仕様となっている。

さらに、こうした電子回路を支えるボディ構造であるが、シャースイ電流によるアース・インピーダンスをシャットアウトするループレスシャーシ

を用いる他、大型の高品質ケーブルも難なく接続できる18mmピッチのRCAアンバランス入力、Yラグやバナナ端子を用いた極太のスピーカーケーブルにも対応する新開発のインラインレイアウト(LR同一特性)スピーカー端子を装備。海外製機器との接続時に便利な位相切り替えスイッチも搭載したXLRバランス入力も用意されているので、様々なオーディオ機器との接続に対応でき、整合性も高い。

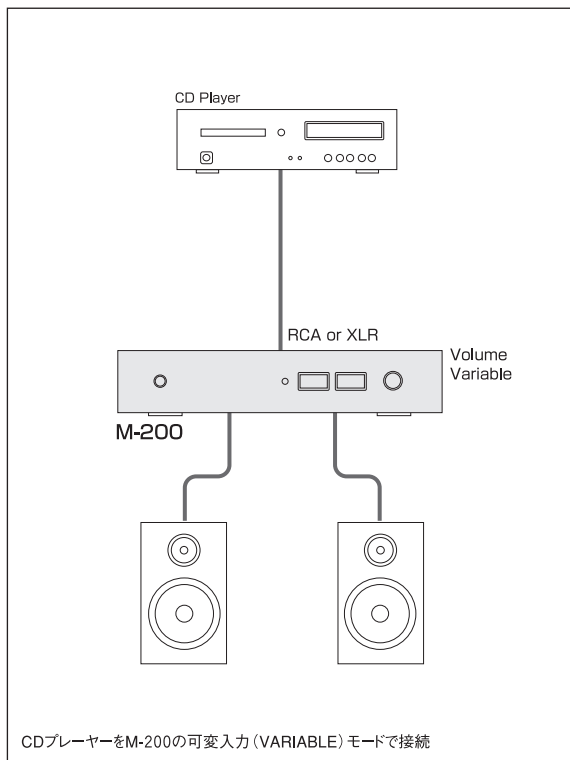
続いて機能面についてもM-200ならではの優れた特徴があるので紹介しておきたい。まずフロントパネルに設けられた視認性の高い7セグメントLEDによるディスプレイである。スピーカー出力(W)値を表示(1、3、5秒の各ホールド時間設定も可能)できるほか、スピーカーインピーダンス設定や明るさ調節も可能となっている。さらにダイレクト入力モードに加え、音量調節可能なリアブル入力モードも装備しているので、M-200に直接CDプレーヤーも接続できるのだ。これらの使い勝手の良さも含め、本冊子ではDA-200との組み合わせを中心にM-200の持つポテンシャルを紹介していこう。



試聴ディスク

- クラシック
東京交響楽団(ユベール・スダーン指揮)
「ブルックナー 交響曲第7番」
Disc : SACD 発売元 : N&Fレコード
- ジャズ
オスカー・ピーターソン・トリオ
「フリーズリクエスト」
Disc : CD 発売元 : ユニバーサルミュージック
- ジャズ
Suara
「Pure2～Ultimate Cool Japan Jazz」
Disc : SACD 発売元 : F.I.X
- ロック
デイヴ・メニケッティ
「MENIKETTI」
Disc : CD 発売元 : DREAM CATCHER
- ハイレゾ音源
Suara
「星座(アコースティックバージョン) 96kHz/24bit」
Media : USBフラッシュメモリー 発売元 : F.I.X

1 Basic System 最もシンプルなCDプレーヤーとの基本システム



通常、パワーアンプへは直接CDプレーヤーなどのソース機器は接続できない。多くの場合はその間にプリアンプやアッテネーターを挿入して音量調節が出来るようにする必要があるからにほかならない。しかしM-200ではリアブル入力モードを搭載しており、ダイレクトにソース機器を繋ぐことが可能となっている。この場合、フロントパネルに設けられたボリュームによって音量を調節できるが、RCAアンバランス/XLRバランスどちらの入力端子からの信号でも対応することができる。予算的にプリアンプが用意できない、または用意するまでの期間の代用案としても活用できるが、スペース的に機器を増やせないという場合などに重宝する機能である。

本項の試聴ではSACDプレーヤーに自社ドライブLxDTMを搭載し、上級機と同じバーブラウン製PCM1792AをDACチップに用いたエントリー機D-05をM-200に接続。スピーカーには高域用に独自のJETツイーターを搭載するドイツのブランド、エラックの310IBを用いた。

背面パネルにあるモード切替を“VARIABLE”にセット。まずはRCAアンバランス入力時のサウンドを確認してみよう。交響曲『ユベール・

スダーン指揮・東京交響楽団/ブルックナー:交響曲第7番第3楽章』(以下、スダーン)では管弦楽器の分解能が高く、爽やかな高域の旋律と、重厚で深みのある低域の響きとのバランスが絶妙だ。滑らかな密度感に満ちており、音像のボトムは太く安定している。

続いて、スタンダードなジャズとして『オスカー・ピーターソン・トリオ/フリーズリクエスト:ユー・ルック・グット・トゥ・ミー』(以下、オスカー)をかけてみると、暖色系で粒立ち滑らかなピアノを中心に、艶やかなウッドベースの弦のタッチと制動を効かせながらリッチな振幅を聴かせる胸鳴りのサウンドが耳に届いてくる。ピアノのアタックが、少々強

調される傾向はあるものの、全体的には耳馴染み良いトーンにまとまっている。スネアブラシのハネも鮮やかで、ボディのリリース感は僅かにふくよかさが残る。さらに現代的な高音質録音のジャズ作品『Pure2～Ultimate Cool Japan Jazz～:届かない恋、夢であるように』(以下、P2)を聴いてみると、すっきりとした音場へ表情豊かなトランペットが鮮やかに浮き立ち、ウッドベースのキレ良い制動感とドラム個々のパートが澄んだタッチで描かれる。

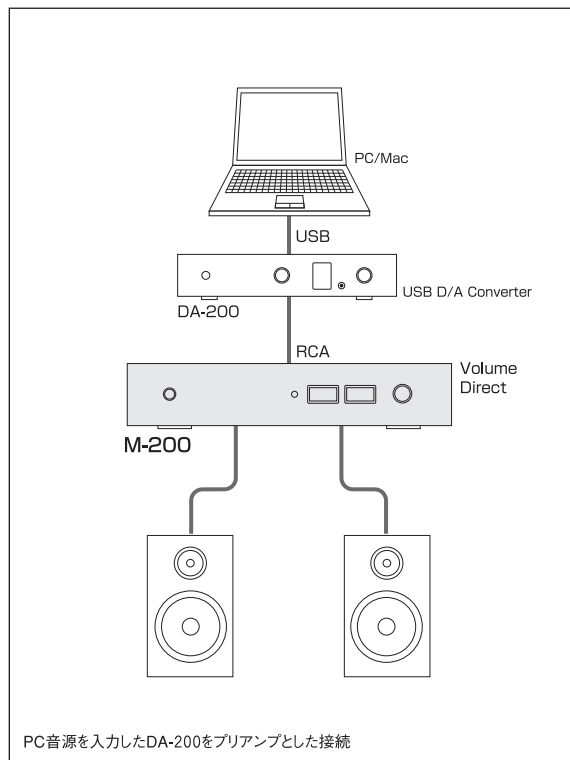
見通し良いクリアなサウンドである。女性ボーカルを含めてボトムの肉付きは良く、口元はクールなエッジ感によってキリッと輪郭を引き締める。アンビエント(残響)感の描写も細やかで、S/Nの高さを実感することができた。

そしてもう一つ、レスポールをリードギターに用いたブルーギーなロックサウンドとして『デイヴ・メニケッティ/MENIKETTI:メッシン・ウィズ・ミスター・ビッグ』(以下、メニケ)も聴いてみたが、エレキギターのディストーションは小気味良く、ベースは力強くタイトに際立つ。ドラムはスマートな音像ながら伸び良いリリースを聴かせ、ギターソロではボディの厚みを伴った渋みのあるリードが楽しめる。ボーカルは口元の張りがスムーズに感じられるが、傾向としては落ち着いた大人のロックというまとまり方となるようだ。

D-05にはXLRバランス出力が装備されているので、本項の最後にM-200とのバランス接続でのサウンドも確認しておこう。アンバランス接続時と比較し、定位や位相といった音場再現力やS/Nの良さの点でバランス接続の方が一歩優位に立っているような印象を受ける。スダーンでは清々しいハーモニーを奏でる管弦楽器の際立ちも鮮やかで、音場の奥行き感も深めだ。P2においては、ドラムやウッドベースの低域の引き締め感が素晴らしく、弾力を感じさせながら、リリースを素早く収束させている。より立体的で収録スタジオの空間を的確に表現できているようだ。トランペットの響きも余韻のコントロールがなだからで、アンビエントの表現也非常に素直である。ピアノも透明感あるタッチであるが、音像そのものに厚みがあり、ボーカルは一層滑らかさが増し、程よい艶とウェット感が加わる。



2 Compact PC Audio System DA-200との組み合わせでPC音源を楽しむ



M-200にソース機器を直接接続してのサウンドも純度が高く非常に魅力的であるが、続いてはメインストリームともいえる、PCに保存した音源をハイクオリティなDACを中心に楽しむPCオーディオとしての提案について、M-200にベストマッチなDA-200を組み合わせることにしよう。なおスピーカーは引き続きエラック310IBを用いることにする。この310IBとM-200+DA-200のシステムは、サイズ感も手頃で、ハイクオリティ・デスクトップを実践できる一つの理想形といえる使用例だろう。

DA-200は前項で登場したSACDプレーヤーD-05のDAC部をそのまま移植し、96kHz/24bit対応のUSB入力やアナログ入力、上位モデルからの流れを汲む高品位なヘッドホン出力まで装備した、意欲的なUSB-DACである。デジタル入力が豊富なので、デジタル・プリアンプとしても活用できるのが注目点の一つである。本項でもDA-200をプリアンプと見立てたパターンのリスニングを試してみたい。DA-200にはグレードの高い高音質ボリュームが搭載されているので、USB-DACだけで使うのはもったいないくらいである。この音量調節

機構を用いるのでM-200とは一般的なRCAケーブルによるアンバランス・アナログ接続を行う。なお試聴に用いるノートPCはOSがWindows7で、ファイルを再生するためのプレーヤーには機能性と音質のバランスが取れたfoobar2000 (WASAPI) を使用し、予めD-05で聴いたCD音源をPCヘリッピング (取り込み) しておいた。ここではハイレゾ音源として96kHz/24bit・WAVで未マスタリング素材が記録された『Suara/USBフラッシュメモリー: 星座 (アコースティックバージョン) 』 (以下、Suara) も追加して試聴を行うことにしよう。

盤面のコンディションによって生じるサーボ電流の増減など、音声回路の周辺要因による音への悪影響が発生するプレーヤーと比べ、PCから直接データを読み出すDA-200のサウンドはサンプリングレートコンバーター段で192kHzアップサンプリングを行うと共にジッター低減効果もあり、S/Nや鮮度の高い瑞々しい音色である。スダーンのオーケストラは張り良く鮮やかな管弦楽器が浮き立ち、音場もクリアで奥行きが深い。オスカーにおいてはピアノのエッジをくっきりと描き、タッチの攻撃感も軽快だ。

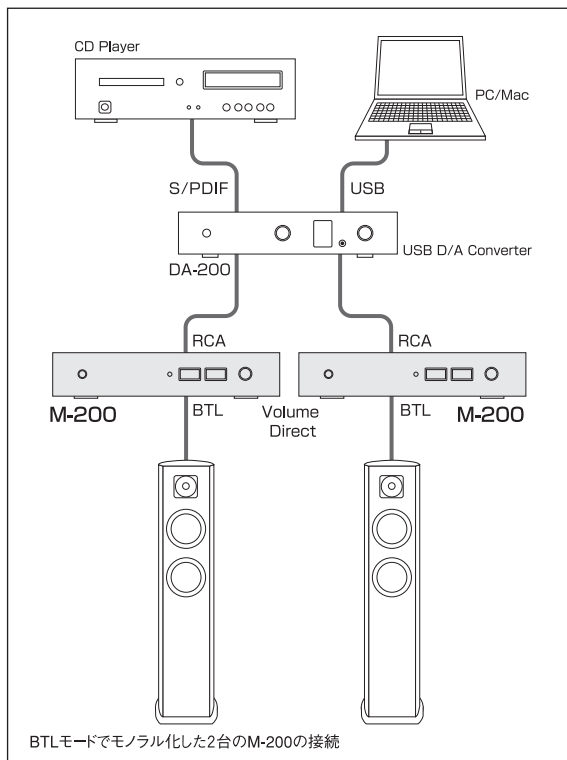


ウッドベースの弦のたわみは元気良くキレのある描写で、胴鳴りは弾力良くなめらかに響く。スネアブラシの攻撃もスカッと切れ味が鋭く、全体的に付帯感の少ないストレートなサウンド傾向といえる。P2ではローエンドが引き締め、鮮やかで解像感の高い音像描写が際立つ。ホーンの攻撃はすばやく、清々しいクールな音色で、アンビエント成分の響きはリアルな余韻として捉えることができた。

ロックのディストーションギターは腰高な描写で、リフのキザミはカッコリした小気味良いテイスト。リズム隊のリリースはキュッと引き締め、スマートな音像にまとめている。ボーカルもソリッド基調でキレのあるスピードに満ちている。最後に96kHz/24bitでのSuaraのサウンドであるが、S/Nの良いクリアな音場へ、非常に緻密で余韻の階調が細やかなピアノがふわりと浮かんでいる。女性ボーカルの質感としては口元をスマートに描き、鮮やかかつ潤い感に満ちたディテールで、リリースのキレがあり、クールな後味を感じさせる。

ここまでのセッションを通じて感じたのは、とても小さなエラック310IBから放たれたサウンドとは思えないほど密度と量感が豊かに得られるという点、さらにはスピード感溢れるレスポンスの良い高域特性を持つJETツイーターを生かし切るという二点において、B4サイズに凝縮されたコンパクトなパワーアンプM-200の持つドライブ能力と表現力の豊かさを実感することができた。さらにPCと親和性の高いDA-200を追加することでそのサウンドの持つ魅力、機能性は倍増し、セバレートシステムであるという物理的メリットを超えた可能性を実感させる。

3 Powerful BTL System M-200を2台使ったパワフルなBTL駆動にチャレンジ



続いて、M-200の持つ大きな特徴の一つである、BTL (Bridged Transformer Less) モードを活用したパターンも確認してみよう。BTLとはステレオアンプのL、Rの出力のうち、一方に位相反転回路を挿入して逆相とし、それぞれのスピーカー出力の十側の1本のスピーカーと繋ぐブリッジ接続とさせることで理論上、通常接続時と比べ出力電圧は2倍、電力でいえば4倍もの出力を取り出せるようになる仕組みである。しかしながら、実際の出力はアンプの諸特性の制約があり、およそ3倍程度の出力となる。BTL駆動ではステレオアンプ1台で左右どちらか1本のスピーカーを担当するというモノラルアンプ構成となる。そのため、ステレオ再生するためには同じ構成のアンプがもう一台必要になるのである。BTLのメリットはモノラルアンプによるチャンネルセバレート性の高さと、駆動能力の底上げにあり、さらなる表現力と力感が得られるというわけだ。

では実際にM-200を2台用意し、BTLモードでのサウンドを聴いてみようと思うが、ここからはスピーカーもより大型の物を用意し、余裕のある音を得られるよう組み合わせを考え

てみた。用意したのはイギリスの名門スピーカーブランドB&Wのリーズナブルなフロア型3ウェイ4スピーカーシステムのCM8である。ケブラーコーンを用いた13cmの2発のウーハー、同じ口径のFSTミッドレンジ、Nautilusチューブ・ローディング・2.5mmアルミニウム・ドーム・ツイーターを搭載したスタイリッシュなモデルだ。M-200はBTLモードへ背面のスイッチで切り替え、L側の十にスピーカーの十端子、R側の十にスピーカーの一端子を接続。入力にはL側端子を使う。このセッティングをもう1組行えば準備が完了する。ここではSACDプレーヤーD-05とDA-200、それぞれのサウンドも確

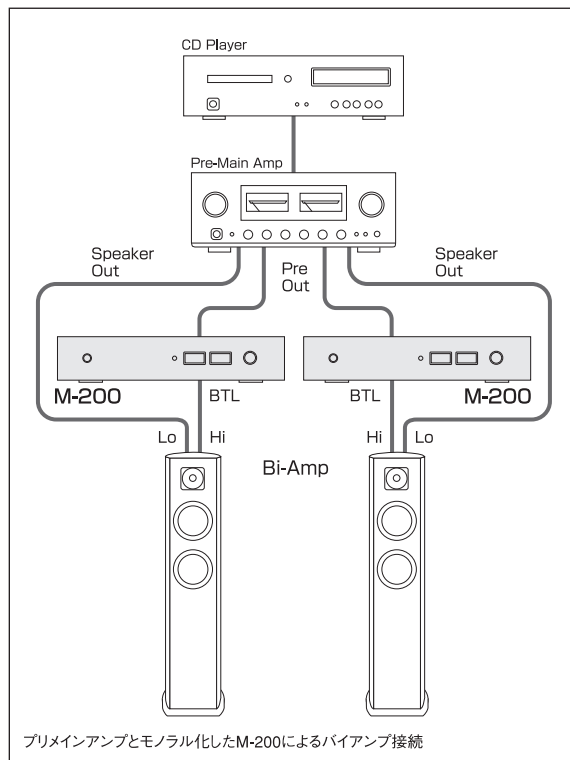
認することにしよう。まずはD-05を接続したときのサウンドであるが、CM8の余裕ある低域が量感豊かに広がる。スダーンの管弦楽器も太く厚みのあるハーモニーで、BTLならではの制動感の高さもあり、質感のキメ細やかさを感じさせながら、高域方向に対しても伸び良い密度あるトーンを聴かせてくれる。音場は広く、奥行きもスムーズに描くが、ホールトーンは倍音の煌き感によって爽やかな余韻を感じることができた。ジャズのP2においても解像度の向上と

共に余裕ある低域の太さが際立つ。ボーカルにおいてもボトムは肉厚で、口元の艶っぽさもほど良く感じられる。ベースは重心が下がり、ギターやトランペットなどの中高域はすっきりと表情細やかに浮かんでくる。アンビエント感も素直で見通しが良い。

続いてDA-200を経由したPCのサウンドに切り替えてみる。D-05で聴いた時と比べ、一段と空間のS/Nが高く、爽快な音ヌケの良さや音場の見通しの深さが増してきた。低域の制動感も向上し、スダーンのホールトーンもローエンドが一層引き締まっているように感じられる。管弦楽器の旋律は重厚でありながら粒立ちがより細やかに整っており、鮮やかでウェットなホールトーンがクリアに響く。オスカーにおいてはダイナミクスのついたピアノのタッチがディテール深く描かれる。ウッドベースは弾力良く引き締めた胴鳴りを聴かせ、スネアのボディも太い。P2においても分解能が高く、残響感の深いリッチな音場表現が感じられる。全体的に細やかなポイントの見通しが向上し、ボーカルにおいても肉付きの豊かさを感じさせながらも音像そのものはスマートに描いており、口元は豊かな倍音成分によって鮮やかに浮き立つ。量感、質感共に非常に充実したサウンドであり、ロックのメニケでも落ち着きさえ感じられる。リズム隊は重心深く、ディストーションは丸みを帯びながらも粘りあるリードを聴かせてくれる。ハイレゾ音源のSuaraでは、ウォーム&ウェットな音像描写に満ちており、音場の前後感も深く、艶やかで生々しいボーカルと、タッチの滑らかなピアノを密度高く堪能できる。BTL駆動における高級機に肉薄した彫りの深い緻密さと広大な音場感は、2台必要とするスペース性のデメリットさえも払拭できる魅力に溢れたものだ。



4 Complete BTL & Bi-Amp System プリメインアンプとのバイアンプ接続に到達



プリメインアンプとモノラル化したM-200によるバイアンプ接続

前項のBTL駆動の応用例として、ブリ段が分岐できるプリメインアンプをBTLモード・モノラル動作によるM-200、2台と組み合わせることで、大きなスピーカーでもさらなる安定度を実現し、表情豊かな高音質で駆動できるバイアンプ接続の例も紹介しておこう。高域用と低域用、2発以上のユニットを用いる2ウェイ以上のスピーカーシステムの中には、クロスオーバーを形成するネットワークを分割し、各々のユニットに対し、アンプも単体で駆動できるようバイアンプ接続に対応したものが存在する。今回使用したCM8もそうしたスピーカーの一つであるので、M-200を2台用いたBTL駆動に加え、さらにプリメインアンプを接続し、バイアンプでのサウンドも確認してみることにしよう。

BTL接続によるM-200は高域用とし、新たに加えるプリメインアンプを低域用に接続しなおすが、本セッションで用いるのは電子制御アッテネーターLECUAやラックスマン独自の高音質帰還回路ODNF Ver.2.3(初段と2段目をパラレル化した高S/N仕様)を搭載した100W×2(8Ω)の高い出力能力を持つ最新モデルL-505uXである(パワーアンプ部のゲイン

はBTL時のM-200と同じ29dB)。“BTL+バイアンプ”という、接続が複雑と思われるかもしれないが、ここで軽くその方法についても解説しておこう。L-505uXにはプリ/パワー段を簡単に分離できる“SEPARATE”スイッチが前面パネルに設けられており、このスイッチを入れることでリアンプとパワーアンプを分離して使うことができる。しかし、このスイッチを入れない通常状態でブリ出力端子からもパワー段に入る前の信号が同時に取り出せるため、L-505uXをそのまま使いながら、ブリ出力を分岐させて活用することが可能となるのだ。

ソース機器にはSACDプレーヤーD-05を用い、その出力をL-505uXに繋ぐ。M-200以上のドライブ能力を持つL-505uXのスピーカー出力にはCM8の低域側ターミナル(予めショートプレートは外しておく)からのケーブルを接続。M-200への入力にはL-505uXのブリアウトからのRCAアンバランス信号をL側とR側、それぞれのM-200へ繋ぎ、スピーカー出力にはCM8の高域側からのケーブルを接続する。BTLモードとなっていること、そしてスピーカー出力もBTL+及びーに接続したかどうか、改めて確認しておこう。



それでは実際にそのサウンドに耳を傾けてみることにする。BTL駆動だけでも十分その優位性を確認できたが、バイアンプ駆動とすることで全帯域で余裕が生まれ、音場自体も天井方向、奥行き、横方向、全方位に渡ってスムーズに音が広がる。リアリティの高さと躍動感、さらにはアタックとリリースの素早さの向上による付帯感のないストレートなサウンドを身に付けているようだ。スダーンではオーケストラの定位感や奥行きの深さが一層増しており、解像度の高い粒の細やかな管弦楽器の旋律は爽やかな浮き上がり、と、落ち着きあるホルトーンを実現させてくれる。ティンパニーの響きも余韻の階調が細やかで、音伸びの素直なサウンドである。オスカーのピアノはアタックのキレが向上し、リリースの付帯感がなくなって見通しが深くなってきた。ウッドベースの弦のこすれはディテールが増し、鮮度も高く感じられる。胴鳴りは制動力があり、弾力も若々しい。ドラムセットの太さもより良くなり、リアルな等身大の立体感・音像感が得られるようになった。

新しいジャズのP2では一層高繊細で、芯の的確な音像表現とアタックの反応の良さが際立っている。ホーンのリリースはバランス良いふくよかさを持っており、アンビエントの階調も細やかで、音場のリアルな距離感を実感することができた。ボーカルにおいても鮮やかな口元の張りが強調され、クールなエッジが際立つ。ボムそのものに厚みがあるので、音像の存在感はキレ良く表現される。メニケのディストーションギターはほどよい厚みと粘りを持っており、小気味良いキザミを味わえる。反応が良いリズム隊は立ち上がりに優れ、充実した厚みを持つボーカルやコーラスとバランス感とスピードを両立した耳馴染み良いサウンドを提供してくれた。

5 スピーカーによる音場再生の楽しみとは

M-200はラックスマンの長い歴史のなかで、これまで培ってきたアンプ作りのノウハウを投入しながらも、PCオーディオの世界をより身近に、そして手軽に高音質化することに貢献したDA-200と同じB4サイズというコンパクトさ、そして並べたり重ねた場合でも収まりの良い高品位なデザイン性によって、高級オーディオの世界にも近い楽しみ方が実践できる、斬新な発想を元に開発されたパワーアンプである。バランス対応やBTLモードの実装など、単品のセパレートアンプとして想定した場合でも十分な機能性の高さを持つ、使い手の良いモデルである点も大きい。高級なラインアップを中心に揃えるラックスマン製品の中において、手頃な価格設定といえる200シリーズのパワーアンプとしての存在を考えた場合、必要最小限の機能性を持つシンプルなハイCPボリューム付きアンプという見方でもできるのだ。

基本的にセパレート機としてのスタイルを踏襲したM-200は本書でも解説してきたように様々なシチュエーションに対応できる拡張性の高さを持っている。それは各人のライフスタイルに合わせ、その時々によって柔軟に対応できる懐の深いアンプであるといえるのだ。DA-200単体でもヘッドフォンを接続し、PCからのサウンドをそのまま楽しめるが、M-200を加えることで、さらにワンステップ広がりのあるオーディオの楽しみ方ができる。

ヘッドフォンをメインとしてオーディオ環境をそろえているユーザーにとっては、そのこと自体が“現代ならではの次世代オーディオスタイル”と捉え、スピーカー再生とは距離を置いている現状があるかもしれない。もしくは純粹に往環境的にスピーカーを鳴らすのが難しい、部屋の大きさや家具などによってオーディオ機器やスピーカーを置くスペースが確保できないといったこともあるだろうが、今一度スピーカー再生の意義を考え直してほしい。

スピーカーで楽しむオーディオの一番のメリットは、部屋の空間を活かした“音場感”の豊かさである。ヘッドフォンでも空間性を感じさせるモデルがないわけではないが、どことなく無理をしているサウンドであるのは否めない。常に頭内定位するヘッドフォンのサウンドは長時間聴き続けるのは逆にストレスとなることもある。ヘッドフォンメインでのライフスタイルも今や標準的ではあると思うが、スピーカーの世界でしか表現できないことも多く、そうした要素がヘッドフォン再生では足を引っぱってしまう

こともありえるのだ。例えばヘッドフォン再生を前提に収録された立体音響・バイノーラル収録音源はスピーカーだと本来の良さを発揮できない。その逆も然りで、立体的な奥行きを前提にして録音された音源にあっては、ヘッドフォンでその空間の広がりや奥行きは感じにくい。オーディオ店の試聴室などで聴くことができるサウンドは自身の環境を使ってスピーカーを鳴らしたときとは大きく違うことを体験されている方も少なくないと思う。そうした鳴らしこみの難しさが原因でヘッドフォンの世界に入ったという方も居られるのかもしれない。

しかしながらそうしたデメリットを払拭できるほど、奥の深い、真のオーディオの世界がスピーカー前提のシステムでは得られるのであるが、やはり鳴らし込みのポイントは存在し、ある程度のセオリーも必要であるものの、最終的には部屋やシステムの組み合わせ、音の好みを考えてと十人十色のパターンがあるのが実情である。

ヘッドフォンをメインで楽しまれている方であれば、ユニットが耳の間近にあるため、ダイレクトな高鮮度サウンドを常にそのまま味わえるということが体感的に理解できると思う。録音の現場でエンジニアがヘッドフォンを使ってモニターするわけは、ミックスした一つ一つの楽器がどういう音の強弱がついているのか(音の定位とその前後感)、音の質感、バランスを見るためであるが、このことを利用し、ヘッドフォンを一つのリファレンスとして考え、スピーカー選びや設置にあたってのサウンドバランスの参考とするという手もありえるだろう。

音のプロであっても空間を使ったりリヴァーブの処理や奥行き感については、スピーカーを使ったモニター環境でないと調整ができないので、そうした項目の確認であれば色々と設置場所やスピーカーの向きを内振りにするかどうかなど、納得のゆくまで調整するという腰を据えた取り組みも必要になる。普段音楽を聴く環境としてPCを使っているのであれば、まずデスクトップスピーカーを用意してからとなるが、アンプを内蔵したアクティブタイプではなく、M-200のようなアンプと小型のスピーカーを用意してニア・フィールド・リスニ



ングのスタイルから実践してみるのはいかがだろうか。

今回使用したエラック310IBのような小型でも細部までこだわり、外装もアルミ筐体とするなど、ヘッドフォンの高級機にも似た独自の思想を具現化したスピーカーを軸に、M-200のように小型でシンプルな駆動系を投入することで、至近距離のリスニングでも驚くほどの存在感あるサウンドが実現できる。手近なところにあるスピーカーを徐々に距離を広げていき、その距離や部屋の大きさに応じてスピーカーも大型化していけばどれだけサウンドに変化が付くかお分かりいただけるよう。それにはM-200をダイレクトに楽しむよりは小音量時のリアリティの良い高精度ボリュームを持ったDA-200やリアンプを追加で接続し、システムを強化すれば良い。スピーカースタンドのいらない、CM8のようなフロア型スタイルの中～大型スピーカーを用いるのであれば、もう一台M-200を追加してBTL接続とすれば、音質バランスを変えることなく、クオリティをそのまま底上げし、より解像感、S/Nの高いサウンドを楽しめるようになる。恐らくここまでM-200を活用すればリスナー自身にもオーディオへの理解とさらなる興味、経験によるサウンド調整のノウハウが身に付くようになるであろう。そこで次なるステップの中で上位プリメインアンプを入手すればバイアンプ接続への道が開かれるのである。昨今ここまで完成度・CPが高いコンパクトなパワーアンプはM-200以外に存在していないのではないだろうか。工夫次第で如何様にでも可能性が広がる、理想的な製品である。ぜひともDA-200やM-200をベースにしてより深遠なオーディオの世界を味わっていただきたいと思う。

岩井 喬